

体育教師のあるべき姿

池 田 隆 二*

The Proper Attitude of Physical Educator

Ryuji IKEDA*

(Received March 27, 1980)

保健体育の研究会で、高等学校に勤務する教師から、「大学の先生は、われわれ現場の者の苦労はわからない」など、現場、という言葉に耳にする。しかし大学の教師は、現場という言葉を使うことをあまり好まない。

これは、大学に勤務する者は、体育に関する理論や方法を研究し、体育学に貢献しなければならない研究者であり、教育は二の次であるという意味がある。

大学の教師は、学究の徒でなければならないことは当然のことである。しかし研究者であることは勿論、教育現場を受けもつ教育の実践者でもある。

一般には、教師という概念を小、中、高校の教師にあてはめているようであるが、大学の教師も小、中、高校の教師とは、何らかわらぬ教育実践者であるが故に、教師という概念はあてはまると思っている。

その意味で、ここで考えようとする教師とは、小学校から大学までの体育科教師をさしている。

常日頃、使命感に乏しく、只漫然と経験に頼り、確固たる指導理念と心構えの確立に乏しい者が、果して指導の責任を負うことができるだろうか。確固たる不動の信念もなく、いつも御座りな指導で、真に学生、生徒に体育する学習態度を確立させることができるのか、と懷疑する。

このように懷疑する時、教師の指導理念と指導態度とは何か、という問題が惹起される。

この問題を考え、自分の指導理念と態度を確立するには、体育教師の問題となる実状を批判すると同時に、自分は、と内省しつつ、他より自分に向けられる批判を卒直に受けとめるところに、真の体育教師としての指導理念と態度が確立されるものと思う。

今、私は過去に実践してきた指導と云われる営みを想起する時、これが私の指導だ、と自負できる指導であっただろうかと自省の念にかられる。只言い得ることは、授業の良し悪しは別として、良い加減な行当りバッタリ的な指導でなかったことだけは、確信をもって言えると思う。

良い加減な御座りな、一時を糊塗する思いつくままのメッキ的指導、覇気のない教師の態度等、それはまさに力なき虚偽の姿で許されるべきものではない。

このような、良い加減な御座りな指導に惰することのないためには、絶えず自省し、実践的学究的態度を確立することである。

教師が学習者に、一つの自己錬成を強いるなら、教師は学習者の数十倍の自己錬成に精進すべきであり、十年一日のごとく、自己変革もなく、同じ感覚と要領で、目的なき指導を、多年の経験のみにたよって実践することは、学習者に何の魅力も、何の感動もなく、自主的自律的精神を培わせることは不可能である。

われわれは、自己錬成の過程で、実践の具体的な理論をつかみ、その理論にもとづいて、生き生きと学習者が実施するような指導を心がけなければならない。

持つものを持っていない、理論なき指導、それはごまかしの指導でなくて何であらう。

例えば、マット運動の時間に、後方転回の練習において、

生徒 手はどうすればいいんですか。

先生 この前やってみせただろう、手を肩巾より少し広げ、手のヒラを上に向けて、思いきって後へ転がらばいい。

生徒 手のヒラを上に向けて転がろうとしても、転がれないような気がしてこわい。

*保健体育系列 (Department of Liberal Arts and Sciences
—Health and Physical Education)

先生 理屈はあとでいい、やってみなければわからん。

又、全身持久力の向上をねらいとした、体力づくりの時間において、

先生 今日は体力をつけるためのランニングの方法として、最近多くの人が行っているジョッキングを行う。

生徒 ジョッキングは、どのくらいの速さで走ればいいんですか。

先生 全力で走るのではなく、とにかくゆっくり走ればよい。

生徒 ゆっくり走るということは、100mをどのくらいの速さで走ればいいのですか。

先生 ……………。

生徒 ゆっくり走る場合のフォームは、どんなふうにすればいいんですか。

先生 ……普通のフォームでよい。

このマット運動と体力づくりの授業でみる、教師と生徒の応答のように、教師が問題を解決せず、俺の示範通りにやれ、自分で適当に考えてやれ、というような指導、これは空虚な実践の指導である（体操やスポーツなど、身体運動の実施は、勘でない正しい理論を感じること、換言すれば、体操やスポーツを科学すること、これを付記したい）。

学習者の当惑せる問題や、心情を見極め、指導するのが教師としての任務である。一事のごまかしの指導からは何が生まれるか、自明の理である。

学習者から提起された問題の事実を直視し、個人的な心情をいち早く把握し、学習者の困惑していることは何か、と追求する心。自分の指導の弱さを自覚し、どうして、どうすれば、と懷疑し、その問題の解決に努力する教師。

このような教師が、学習者を理解し、感銘をあたえる指導者となり得るのである。

この問題に関連して、実際の授業を通して体験したことを述べてみる。

最近、I君と云う学生にバドミントンを指導した授業のことである。

最初の授業時、ハイクリヤーの練習中、ラケットを振っても振っても、空振りばかりし、練習相手も困惑しているI君の様子が目にとまった。よく彼の技術に注視していると、サーブを打つ時でさえ、シャトルがラケットに当らず、ひとつひとつの動作もリズムに欠け、恰もロボットのような身のこなしで、運動の基本すらできない

状態であった。I君はコートに入っていない間は、何時も体育館の隅で一人ぼつねんとして腰を下していた（このような学生に時々出会う）。

このI君を見てから、彼の課題として、皆と一緒に練習に参加できることを念願し、個人的にからだの動きの様態を重視しながら、シャトルを打つ、受けるなどの基本的な練習を私と一緒に練習させた。

この時、バドミントンでシャトルをラケットにあてる要領、という思いも考えもしなかったことについて、深刻に考えると同時に、どのような指導法が最も効果的か、という問題に私自身悩み腐心した。

しかし、その努力にもかかわらず、彼はクリヤーを連続して打つという技術の進歩をみるができなかったが、授業の後半に行なったダブルスの試合で、彼はクリヤーされたシャトルを“かえしてやろう。”とする気迫と、失敗した時“くやしい。”という素振りがみられるようになった。

彼と私の努力は、彼に意欲をもたせ、積極的な態度の涵養によって、進んで皆の中に参加するようになったことは、大なる収穫であった。

授業が終った時、「小、中、高、大学を通して、体育の授業は自分にとって何であったか」と云うテーマで学生に感想文を書かせたが、I君は次のように書いてあった。

「体育は、学校の授業の中で、どの科目よりも一番嫌いな科目であった。高校時代は、体育の時間に出席だけで、できようができませんが、やらされることだけであれば単位がもらえたので、仕方なしにやってきた。小さい時から外で遊ぶことはあまり好きでなかったの、その延長のような体育は面白くなかった。小学校低学年の時は、まだできないことははづかしいとは思わなかったが、だんだんはづかしいと思うようになった。中学くらいからはひらき直ったのか、何とも思わなくなっていた。小学校2年の時は習字、4年でソロバン、中学2年3年は、英語と数学の塾へ通った。からだを動かすことを学校の体育の時間に、へたな者はへたなりに、個人的にでもちゃんと指導してもらっていたら、これほどまでに体育がにが手になることはなかったかも知れない。私はこれで体育もなくなりほっとしているが、今考えてみると、はづかしいとか嫌いだとかばかり言っておれず、この授業で身につけた少しの自信を生かし、他人と五分五分くらいまでになれる、いろいろなスポーツを身につけたいという意欲が、ようやく大学の体育の中ででてきた」と。

以上の体験の一例を通して思われることは、教師は、指導の責を負う立場上、この課題に対して、自分の指導

はこうだ、と言い得る指導がなくてはならないということである。

持つべきものを持っている教師の一言一句は、実に力強く、奥ゆかしいひらめきがあり、それが効果的に脈々と学習者に伝達されることによって、学習者に深い感銘をあたえることでなければならない。

よく見聞することは、学識に乏しい信念なき指導者は、これを知らなければ新時代の体育専門家でない、これを知らなければ新しい指導者でないとか、高遠な学理の探求を忘れて、むやみやたらに新奇を追い求める浅ましき姿、何々の会で〇〇先生はこのような言ったとか、確固たる学理も信念もなく、只新奇を追い求めるために右往左往するその姿には、同情の念すら禁じ難く、さらにそれは、教育を冒瀆するものと憤りすら覚えるのである。

指導者たるものは、自己練磨のために、自ら研修に励む態度の確立に賢明でなくてはならない。学なき力なき者は、指導者としての道から逸脱している、といっても決して過言ではない。

体育教師の研修には、教師の精神的努力と身体的努力の両面があると考えられる。しかも、その両面の努力は、両面の軽重を問うことではなく、それは恰も鳥の両翼、車の両輪の理である。

研究する条件と時間に恵まれた環境にある者は別として、一般の教師は、一つの問題を深く探求する時間に恵まれない。しかし、多くの研究者や実践者の研究成果を吸収消化し、自分のものとしての学識を豊富にしておく、精神的努力がなされなくては、学習者の知的、身体的、技能的発達に応じ適切な指導はできないであろう。

多くの指導の任に当る者が、この問題に直面すると異口同音、暇がない、と言うことを耳にするが、ほんとうにそうだろうか。

暇、時間がないという者は、自分が自由に使える時間を善用することのできない人達ではなかろうか。

われわれは、自由に使える時間を、学習者のために常時善用することに心がけるべきである。暇の時間を善用することのない教師は、専門書さえもひもとかず、指導上の問題に取りくむのでもなく、体育についての話し合い、また研修会にも勧んで参加するものでもなく、むしろそれ等より逃避しようとするのである。このような教師は、体育の指導者として資格なきものであると思う。

教師は日頃、自分の未熟の淋しさをかこちつつ、学

的に必死に努力する謙虚な態度を確立することにより、教師たる所以がある。研修の道に邁進するその尊い姿こそ、真の教師としての資質が磨かれていくのではなかろうか。

学なき実践、理論なき実践に陥ることは、体育教師として許されるものではなく、そぞろ哀をもよおすのである。

教師の精神的努力と身体的努力が、体育指導の効果を左右することは、論をまつまでもないことである。

体育の目的、それは身体活動を通じて人間性の形成である。

それ故に、体育教師は、日々の身体的努力としての実技研修が不可欠なものとなり、実技研修を怠ること、それは実践なき理論的指導に陥るのである。

体操やスポーツは、人間には必要欠くべからざるものである、といくら説明しても、体操やスポーツのより良きフォームが示範できなければ、体育教師としての資格がないのにも等しい。水泳は、人間生活上必要なものであるが、泳ぐ方法をいくら理路整然と説いてみても、泳げることができなければ、もはや何をか言わんや、でここに理論と実践の両立が、体育教師には必然的に要求される所以である。

身体的努力としての実技研修をする場合、次の二点に努力しなければならない。

一つは、理論に裏づけられた上手なフォームを身につけることであり、一つは、下手なフォームの示範（中でも原因となるキーポイント）ができるようになることが肝要である。

そのために教師は、高度な技術や理論を参考に、自分の技術を練磨する努力は勿論のこと、それと同時に、学習者の技術の程度に応じて、示範できるフォームを身につける努力をはらわねばならない。

とかく上手なフォームだけを示範し、下手なフォームは示範しないが、下手なフォームの示範をすることも必要である。高等な示範技術を学習者の前で、得々ともて遊んでいる指導者はあっても身、自ら対象と同じ立場に立って考え、解決してやる事を忘れておる指導者の姿を、残念に思われて仕方がない。

体育教師の示範は、芸術で云う鑑賞（観賞）に相当する。

芸術には、創作と鑑賞の二面があると思う。それを体育学習におきかえると、体育学習はややもすると、創作のみに偏し過ぎるきらいはありはしないか（近年のリズ

ム運動＝ダンス＝においては然り)。もっと学習者が鑑賞することを、体育学習の中に取り入れる必要があると思われる。

体育学習における鑑賞法には、視聴覚による8mm, 16mm映写からVTR, 学習者同志の試合などを見学する方法があるが、なかんずくいつまでも学習者の脳裡から離れることなく、イメージ化を促すものは、何と云っても指導してくれる教師の示範である。

教師が、上手なフォームと下手なフォームを示範する時、学習者はその示範に感服し、教師への信頼感はますます高まり、学習者自身が自信を得、動機づけられるなど、よき示範は、学習者の技術習得には効果的な鑑賞法となる(見取練習)。

一つの種目の優秀さを誇示する教師が、必ずしも優れた教師とはなり得ない。

往々にして、得意なスポーツ種目は指導するが、不得意な種目は指導できない、というのではなく、自分の不得意な種目こそ、教材研究に専念し、学習者の立場に立ち、自ら成功感を味わうことによって、はじめて指導現場で学習者の心情を思いやると共に、指導の適切を期することができるのではなからうか。

それ故に、体育の教師は、野球家でも武道家でも、ゴルファー等のプレイヤー的存在であってはいけない。

体育教師は言うまでもなく、体育の専門家でありプレイヤーではなく、本質的には教育者でなければならない。

いつも話題となる多くは、運動部の対外試合の結果論、プロスポーツの批評など、スポーツの技術面のみに熱弁を振うが、授業過程の反省や思考、体育の原理と方法についての討論などは稀である。

体育教師は、勝負や記録に挑戦するプレイヤーである前に、授業過程の反省と研究を思考する教師であるべきで、体育教育はプレイヤーの養成が目的ではない。

例えば、走るのは人より馬の方が速いが、体育はその馬を養成するのではないことを、肝に銘じるべきである。

学習する者は、優れた存在でも、又優れた技術を望んでいるのではなく、ただ望んでいることは、教師自身が学習者の立場に立って、一緒に学習過程に取りこんでくれる指導者である(師弟同行)。

学習者と共に学習過程に取り込む教師は、自分の力なさを自覚し、じっと思考していると、学習者の動きや素振り等が理解でき、彼らも自分と同じことに困惑していることに気づく。その時、寛容な心で学習者の悩みを受

けとめ、懇切丁寧に指導してやることができるのである。

これらの教師こそ、身、自ら身体的努力に精進する教師像であろう。

私は、これまでの授業における教材として、バレーボール、バスケットボール、ソフトボール、ラグビー、テニス、バドミントン、徒手体操、器械体操、陸上競技、柔道、卓球、サッカー、水泳、サーキット・トレーニング他各種体力づくりトレーニング等々、数多くの運動種目にたずさわった。又課外の体育活動として、スキー、登山、キャンプなど、数えあげればこんなにも多くの運動種目を体験し、よくも指導したものだ、とわれながら感心するのである。

これらの教材を指導する場合、事前に自分で練習したが、それは練習した種目の体験を通して、その運動のむつかしさや、楽しさや、指導の要点を知ることがどうしても必要であるからである。

只漫然と、経験や熟達せる技術に頼るだけでなく、学習する対象に即した指導過程に、不断の工夫と研究がなくして、真の指導は生まれないと考えるからである。

只管思うのに、多くの種目を指導したものが、少ない種目の指導体験者より、それだけ自分の努力の体験を豊富にせねばならない。

持つものを持っている教師は、指導の技術が豊富で、学習者の技術の発達段階に応じ、適切な処方ができるのである。

私が、特に学生時代に取りこんだ、体操の指導一点張り、今日まできたとすれば、体育教師のあるべき姿について、苦慮することもなかったかも知れない。

しかしながら、体育学習は、教師と学習者の共同の仕事であるという立場からすれば、教えることと学ぶことは、学習過程において表裏一体をなすものである。

したがって、すべての教師は、換言すれば、それは一人の学習者でもある。

この観点から教師は、学習者から間接的にある物を得るという態度をもつべきであって、これはあたかもイカダ流しが、共に足を濡らし、からだを支え合い、目的地に向って進む状態と何等異なるものではないと云えよう。

この意味において、日頃教師は、できるだけ多くの実技研修会等に積極的に参加し、学ぶ立場を経験し、将来の指導の資料とすべきである。

一回の研修会で、数多くのポイントやコツを得て帰った経験は、多くの教師が体験した事と思う。得意な種目

で参考にならなくとも、研修会を通して、非常に共鳴し、今まで気づかなかったことがらに出会うこともあるが、これらのことがらも教える立場から教わる立場に回ってこそ、はじめて得られるものである。

しかし、研修会に参加した教師が、〇〇先生の指導はよかった、△△先生はこう言っていた、と感心すること自体、自分の指導の参考となり、知識を豊富にすることにはなるが、それを鵜呑みにすることなく吟味思惟することが大切である。ただそれを模倣したり、無条件に迎合することは、厳に戒めなければならない。

只単なる模倣は、先述の一時を糊塗するメッキの指導と、空虚な学習に終始することを忘れてはならない。

よく「厳格に指導している」という教師の言を聞くが、教師が必修させたい事項に直面した時、教師は毅然とした態度を示すべきである。

厳格に、という教師の言葉の中には、厳格とは、権威を振舞い、罵声を浴せ、叱りつけ、極めて粗雑で乱暴な言葉を使い、規則一点張り、絶対命令に服従することであるかのように考えておるようだが、寒心の至りである。

厳格に指導している、と自称する教師の多くは、訓育を大声で叱ることと同義語に解しているようだが、それは間違っただけである。

訓育というのは、身体運動の中で、教師と学習者の共同の営みから、感情や意志を陶冶し、知的にも道徳的にも刺激をあたえ、知的道徳的訓練をほどこすことであり、叱りつけることそのものが、訓育につながると考えることは、誤りであることを銘記すべきである。

このような授業は、一見整然静粛、万事徹底しているかのように吾人の目に写るが、学習者には、生々とした活気に満ち溢れたものでなく、恰も魂の抜けた蛻の集いの感じすら抱かしめる。

叱りつける教育よりも、褒める教育の方が、どれほど教育効果に直結するかを心得るべきで、教師が権威を振り舞う授業においては、学習者は、このような授業より一時も早く逃避することの願望以外何物もなく、続行したい、という意欲を醸成することは望むべくもない。

このような、一糸乱れない授業形式を、厳格に指導しているという錯覚に陥り、得意然としておることは残念に思う。

教師の独断専横な、命令に従わせる指導は、教師にとって一番楽な方法であるが、学習者にとっては一番苦痛なものであると思う。

独断専横な教師は、学習者を深く感動させる様なことは、微塵も期待できないことは勿論のこと、学究的な態度や能力を身につけようとする努力は、不必要なものと考えているのではないだろうか（話に聞く旧陸軍軍人の体操教師と称する人の体操指導を連想する）。

教師自らの変革も、学習者の変革も期待できない方法は、指導者の取る態度として、厳に慎むべきで、教師は学習者のレディネスをつかみ、心情を深く洞察し、肝心な時に勇気を振起させ、真の愛情により共に悩み、苦しみ、学習者とともに精進するところに、真の体育教育が醸成されるのである。

独断専横な指導よりも、学習者の自発性を強調し、それがため教師の積極性が欠如し、放任同様な教育に陥る指導には、特に留意しなければならない。

学習者の自発性を尊重するということは、戦後の教育の方法学的原理であるが、この教育の基本を間違えて受けとめている教師のあるのを遺憾に思う。それは、学習者への指導をさし控えて、彼らの自発的活動に依存するのが、恰も自発性を尊重する教育であるかのごとく思っているようだが、このような教育の基本を誤った指導が、ともすると放任同様な教育となるのではなからうか。教師が学習者に積極的に指導の手を下すことにより、はじめて学習者の自発性が触発されるのである。

学習者の自発性、主体性、自主性を尊重することは、積極的な指導と矛盾するものではない。

例えば、バスケットボールのグループ学習で、学習者が一時間中話し合いで終始し、練習する時間を持つことができなかった授業についても、学習者の自発性を待ち望んでのみいる教師であってはならない。

グループ学習は、学習者ひとりひとりが協力し合って、自主的に集団活動を行ない、その営みは、学習者の自発性に待つことはいままでのない。そのことは、教師が指導をしないということにはつながらない。

教師は、その時間の到達目標達成のために、グループ活動がなされていない場合は、グループが自ら成長発展するように助言し、場面構成をしてやる積極的な指導が、真に学習者の自発性を呼び起こす指導である。

体育学習におけるグループ学習は、場合によっては、無計画な授業形態のごとく感じさせることもある。

研究会の席で、グループ学習を実施した時、体育の時間は遊ばせているかの様な錯覚をする人がいた、と述べた教師がおったが、その教師は、「私は決して遊ばせているのではなく、生徒の諸活動には、終始注意し、必要

な時にはアドバイスをしている」と語気を強めていた。

体育の実技授業は、運動場が教室である故、誰でも見学することができる。そのために、授業の一コマだけを見た人から、心もとない批判もあるが、先述のような「遊ばせているのではない」と強調する言葉には、決して放任している授業形態でないという自負心があり、学習者の活動が成長発展する場面構成に、終始配慮し、機を得て助言し、学習者の自発性を喚起しつつ指導しているのであって、遊ばせているかのごとくに見える時でも、陰に陽に間接的な指導はなされている。

教育の過程は、教師が微に入り細にわたり指導するよりは、学習者に自発的研究の場を与えながら、必要感に迫られるまで指導の手を加えず、指導が見えない指導の場面を設定してやることも、一面、価値ある指導法と云えるのではなかろうか。

指導が見えない指導と合わせ、体育教師は、学習者と共に汗を流し、一緒に問題を解決する実践的態度がなければならない。

教育は人格と人格の触れあいであり、学習者は、教師の実践的態度に接することにより、必然的に人格から滲み出てくる権威に対して、満腔の敬意を表する。

体育教科が、他の教科にみられない価値というものは、教師对学习者、学習者と学習者のスキンシップが教場でいかに発揮されることである。

それがため、体育教育は、人の心の問題に深く触れることができるのであって、身体運動というのは、体の訓練即増健的なもののみでなく、すべての運動刺激は、からだを通して精神作用に関与する。

それ故に、教師と学習者が自然の姿にかえり、赤裸々な気持で触れあい、ともに汗を流すことによって、心の触れあいをもつことができるのである。

身体と身体、心と心の触れあう教場で、教師の実践的態度の欠如は、真実の体育教育を期待することは至難なことである。

よい授業を構築するには、教師は教える意欲、学習者は教わる意欲を旺盛にし、お互に情熱と信頼の関係がなければならない。

教師は、一単元の目標をたて、その進度にしたがって指導して行くうちに、個人個人の学習の方法等を考え、十分な目標をもって、それが達成のため、情熱と意欲を燃やし授業に対処して行くとき、学習者は鼓舞激励され、学習意欲を燃やし、自己の人間形成に邁進するのである。

若き教師は、未熟、未完成の中にも燃えあがるが如き情熱によって、学習者の心底に触れ、学習者の憧憬的となるべきである。

一方、教師が若さと情熱を失わぬためには、日々の指導態度確立への営みに徹しなければならないのである。

教師は言うまでもなく、健康と根気、学問研究と人格を媒介とする職業である。教師の顔色が蒼白病弱で指導にねばりがなく、学識浅薄で人格的に何の魅力もなく、人間性を欠き、虚偽の渡世にきうきうとする、教育の仮面者に学生生徒の指導はあり得ないのである。

体育教師は、誰の前でも何時でも、誇張し得る学理と技術をもち、これが私の指導だ、信念だ、この問題については斯あるべきだ、と確固たる不動の信念をもたねばならない。教師としての研修が不可欠なものである根拠も亦そこにある。

そして、それらの信念によって、普通の者より劣っている学習者を、指導する熱意と努力によって、対象者に失望感をあたえることなく、進んで物を試みる態度を形成させなくてはならない。

このような、教師の撓まざる努力と精進により、専門的な知識ならびに技術や、体育に関する原理と方法を知り、さらに、広い人間の教養と人間的魅力を生み、教師自身を変革させるのである。

そして、自ら変革できる教師が教場に立った時、真実の体育学習が展開されることを信じて止まない。